

かごしま 祭時記

これからも知恵をしぼり
守り継いでいきます

南さつま市大浦地区自治公民館連絡協議会

会長 村田 敏雄 さん(71)

祭りの記憶は、4、5歳の頃からあり、ヤツデを竹の棒の先に挿し、小さい体を精一杯伸ばしてセガキもらったのを覚えています。現在は、旧暦11月の最初の申の日に近い新暦12月の日曜日に行っていますが、今年の開催日である12月8日は、数十年ぶりに申の日にあたるので気持ちも高まります。近年は、大草履用の大量の藁を確保するのが難しくなりましたが、知恵をしぼりながらこの祭りを守っていきたいと思います。



←祭りを終えた大草履は片足のみ保管し、残りは肥料として再利用する。(写真は上からみた大草履)

南さつま市／大浦町大木場地区 大山祇神社の 山神祭り

大草履を奉納する

平家落人伝説に由来する祭り

晩秋の午後3時、うっそうとした小さな村に太鼓の音と「ヨイショ」のかけ声が響き渡ります。観衆が見守る中、直径約2mの大草履を履いて、神社の石段を降りて行く2人の氏子。片足の重さは約30kg、計60kgの草履を履いて歩くのは若い男性とはいえず、ひと苦労。神社の拝殿にたどり着く前に力尽き、「もう無理」と言いながら転んでしまう青年に、「キバレ(がんばれ)」の声援が掛かります。このユニークな行事は、1186年に現在の浦町大木場地区に移り住んだという平家落人伝説を今に伝える、大山祇神社の山神祭りです。

「この祭りは、追っ手の源氏を追い払うため、峠道に十畳ほどの大きさの草履を置いたところ、『大男がいる』と恐れて追っ手が退散したという伝説に由来します。その時、猿がたたくさん現れて追っ手を防いでくれたことから、人々は無病息災と五穀豊穡を願って大草履を編み、霜月(旧暦11月)の最初の申の日に、山神を祀る大山祇神社まで運び奉納するように

鹿兒島には、古くから受け継がれてきた個性豊かな伝統行事祭りが残っています。今回はそんな伝統行事の中から南さつま市大浦町に伝わる「大山祇神社の山神祭り」をご紹介します。

なつたと聞いています。こう話す村田敏雄さんは、若い頃から祭りに携わり、守ってきた氏子のひとり。7年前までは、平家落人の子孫と伝えられる金子家が代々神事を行い、最後は金子家に大草履を納めていたそうです。現在は自治会が祭りを引き継ぎ、祭りの終了後は大草履を公民館に運んでいます。拝殿では「セガキ」と呼ばれる赤飯が振る舞われ、人々はヤツデの葉で作った器に入れて持ち帰ります。この赤飯を食べると一年間、健康で幸せに過ごせると言われています。一年間無事に過ごせたことを山神に感謝しながら、次の一年間の幸せを願う祭りです。



南さつま市

南さつま市は、平成17年に加世田市、笠沙町、大浦町、坊津町、金峰町が合併して発足した総人口37,584人(平成25年9月末現在)のまちです。薩摩半島の南西部に位置し、海岸線の北西部には日本三大砂丘の一つである「吹上浜」が広がり、南西部にはリアス式海岸が続いています。写真は、笠沙美術館展望所から見る沖秋白島。市の南西部を循環する国道226号沿線から眺望できる雄大な景観で、南さつま市を代表する八つの景観「海道八景」の一つになっています。